附属幼稚園としての実習生指導について

上田女子短期大学附属幼稚園
副園長　　佐藤　利佳子

はじめに

本園は附属幼稚園として、幼児教育学科二年次学生の「教育実習Ⅱ」の受け入れを主として、一年次「基礎ゼミナール」での観察プレ実習、また大学研究の一環として教員に開放される研究保育参観、さらには卒業研究への協力等など教育研究機関としての特徴を持っている。

中でも附属幼稚園の役割として実習生の指導は大きな位置を占めている。教育実習Ⅱでは年間７０名ほどの学生を受け入れている。本園は６クラス編成であり、一回に一クラス２名～３名ほどの実習生を受け入れ実習指導を担っている。

１．教育実習生を受け入れるにあたって

教育実習は学校で学んできた基礎的理論を、実際の現場で園児たちとふれあいながら実感し、教育者としての資質を高めていく場であると思っている。

当然のことながら、毎回いろいろな学生がやってくる。我々教師は「出来て当たり前」という考えではなく、「出来なくて当たり前」という気持ちで実習生を受け入れることにしている。学生たちは非常に緊張して実習を迎えていると思う。それは事前指導のため園に訪れたときの様子からも伺うことが出来る。分かっていることが分からなくなってしまったり。出来ることも出来なくなってしまったりする場面をよく見かける。

実習生が緊張を乗り越え、前向きに実習に取り組んでいくためには常に「子どもから学ぶ」という意識を持って子どもたちと向き合い、実習に取り組むことが大切になってくると思う。「子どもから学ぶ」という謙虚な姿勢で実習に取り組み、その気持ちが学校に戻ってからの学ぶ姿勢につながっていってほしいと願いながら、我々もその意識を持って実習生と向き合うことにしている。

２．実習生に課していること

教育実習の内容として次のようなことを指導している。

① 園児、保育、生活等の観察。記録のとり方

子どもたちのありのままの姿をしっかり見取ること。遊びの様子から次への発展性を見極め、援助の方法をさぐること。教師の動きや援助の仕方等を学ぶこと。それらをていねいに記録していくことなど、観察しながら学び取っていくことは保育現場において重要なことである。しかし実習生は目の前の子どもたちと関わることで精一杯になってしまい、観察、見極め、記録するという点において不十分なことが多いように思う。

「感じ取る」「気づく」ということを本園では大切にしている。それゆえこのことに関して、毎日の反省会、研究会において保育や子どもたちの具体的な場面を振り

返りながら細かい指導や確認を心がけている。

② 「幼稚園の一日の流れと配慮」「部分実習指導案」「主活動指導案」「個人記録」の作成

上記したように「観察」「見極め」を意識していくための一つの手立てとして「幼稚園の一日の流れと配慮」というものを記入させ実習一週目の木曜日に提出させている。園の様子、子どもの姿、教師の動き、そこに配慮されているものを見極めながら記入していくことにより、実習生としての動きや指導案作りに生かされていくものだと考えている。これを書かせてみると実習生の目線、意識していること、また全く目に入っていない部分等がはっきり読み取れてくる。担任としても実習生を指導していく上の手がかりとなっていく。

子どもたちの前に立つときには、しっかりした計画と準備が必要になる。そのためにも「指導案」の作成は欠かせないものである。

部分実習は実習二日目から毎日行われる。主活動(全日実習)は二週目の後半におこなうようにしている。実習生は毎日指導案を作成して提出している。学校において理論的に指導案作成の手順を学び、何回か書いてもいるが、実際子どもたちを目の前にしながら、より子どもたちに即した指導案作成をすることは実習の機会でなければできないことである。

毎日書いて添削されまた書き直すというのは厳しいことではあるが、実習生自身のために努力してもらっている。書くことにより、より考えるようにもなり、工夫もみられてくる。また「書く」こと自体に慣れていくことになる。

しかし現実には指導案を書くことになかなか慣れていかない。(当然ではあるが)いろいろな場面を想定しての援助がなかなか考えられない。ひとつの活動や手立てなどを考えると、それに捉われすぎて視野をひろげて考えられない。など様々な問題が浮かび上がってくる。担任はそれらを一つひとつ指摘し、一緒に考えながら書き直させていく。担任にとっても大変なことであるが、こちらが思っている以上に実習生にとって苦しい部分になっていることを感じる。

「個人記録」は子どもたちを理解していくため。また実習生自身の動きや子どもたちへの援助のあり方を振り返るために必要不可欠なものと考えている。

この記録を見ていくと、実習生自身がどの子との関わりが多くて、どの子とは少ないのか。子どもをどう捉えているのかが現れてくる。しかし実習生にとって個人記録をとることはなかなか大変なようで、よく関わって遊んでいるようでいて文章にして表現できない学生が多くいる。

遊びこむことと、しっかり見取る、観察する目を持つことの難しさをここでも感じる。「～で遊んでいた」「～だった」という記述にならないよう、その子の姿や想いがより浮かび上がってくるような書き方、捉えかたになっていくように、そしてそこから何を感じ取ったのか・・という部分にも気持ちが向けていけるような指導を心がけている。

③　一日の反省、及び研究会

この時間は担任が一方的に話すのではなく、実習生自らが疑問に思ったことや指導して困ってしまったことなどを語ることにより、幼児理解をより深め自らの課題を明確にしていく時間と位置づけている。しかし実習生も様々でありまた遠慮もあるのか自主的に話すことが少ないのが実態である。そのため担任はいろいろと工夫をしながら実習生から話しを引き出すようにしている。自らの言葉で表現し語ったこと、それに対して担任と一緒に話し合ったことは実習生のなかに残っていく。根気のいることではあるがそのような時間となるよう努力している。

3．実習日誌の記述から

２の①の中にも記したが、本園での実習指導の中で「見取り」「気づき」という二点に重点をおいている。

ここでは実習生の実際の実習日誌を見ながら検証してみたい。（資料参照）

なお本来実習日誌には子どもたちの名前が実名で書かれているが、ここではアファベットに置き換えさせてもらった。

ここに載せてある実習日誌は実習五日目の記録である。

【資料①　②について】

実習生が書いたように担任は常に子ども達とのコミュニケーションや信頼関係づくりを重視している。今までもバスへ行く前の声掛けや、戻ってからの子どもとの関わり大事にしていたが、あまりにも自然な様子で担任がおこなっているので実習生は意識することなく過ごしていた。ここで初めて子どもの表情の輝きに気づき、なぜそうなるのか。担任と子どもたちのつながりに改めて目が向き始めた場面と捉えることができよう。

担任も「このような意図がある」と言葉で示すのは簡単なことなのだか、実習生が気づくのを待つことにして、あえて指導はしなかった。この日の反省会のとき、この子どもの表情の変化に気づけたことをしっかり認めていった。

【資料③について】

実習はじめの頃はとにかく子どもと一緒に何かしなくては。という思いから片付けなども先に立って行う姿が多かった。しかし前々日担任から「片付けのとき子どもたちのどのような姿が見受けられたか」と問われたとき、返答に窮してしまった。担任から「子どもたちがどのように片付けに関わっているか見てみたらどうか。」とアドバイスをもらったことにより、しっかり観察しようとした。１０月後半の年長の子どもたちにとってどうすることが大事か。と考えるようになったことが③の思いにつながっていったと考える。

【資料④について】

このクラスは話し合いの場。みんなで考える場を大切にしたクラスづくりをしてきた。運動会も終わったこの時期は一つの成長期ともいえる。友だちの意見を聞き、

自分の意見を持ち、共に考え合っていかれる時期にもなっていく。
考えあいながら共に育っていく子どもたちの姿を願って担任は日々の保育をおこなっている。そんな場面をたびたび目にしていく中で、実習生も担任の思いがくみ取れるようになり、子どもたちの育ちにも少しずつではあるが目を向けられるようになってきている場面と捉えられよう。

【資料⑤について】

④の場面同様少しずつではあるが、先のことを考えながら今どうすることが子どもたちの育ちの援助につながるかを考えて行動した場面と捉える。これは担任の姿から学び実践の場面で己の動きを意識していったからだと思われる。

実習生が「今日試みたいこと」の欄に「子どもたちの遊びを一歩ひいたところから観察する」と記したように一歩ひいて見守ることにより子どもたちの姿や力を見極めるいい場面であったと思う。

【資料⑥について】

ここではこのジャンケンゲームだけではなく前日までの担任と子どもたちとの関わり、朝の話し合いの様子などを含み捉えていこうとする姿が伺える。

【資料⑦について】

一週間の実習を振り返り、反省しながら新た課題を持って頑張ろうとする気持ちが感じられる。継続活動の中、教師の先の見通しを持った援助のあり方の重要性に目がいくようになってきている。
子どもたちの姿を見取ろうとする気持ちを持ち、子どもたちやクラス全体の変化等に気づいていくことによって、より考えていく力が深まっていく。
また実習生自身のなかに実習に対する手ごたえのようなものが芽生えてきたように思う。

ここに載せた実習日誌は特別よく書けているというものではない。一般の実習生と同じように戸惑いながら少しずつ回りの様子から気づき学び取っていけるようになってきた例としてあげさせてもらった。少しずつでも捉え方の変わってきたことを見逃さずに記録しようとする姿が伺える。そんな姿を認めていきながら共に考えていけることが指導者には求められていくと思う。

4．まとめとして

保育の現場は日々めまぐるしく動いている。そのため実習生に対しての実践的な力の要求度も高まっている面もあると思う。しかし実習生すべてが実践的力をもって実習に臨めるわけではない。　現場に来て子どもたちと関わり、教師の動きから学びながら実践的力をつけていく部分が大きいと思う。そうするためにも実習生自身にいかに自覚をもたせて実習に取り組ませるかが課題となってくる。

「幼い命を預かり、生活しながら共に学んでいく」そんな現場の厳しさと、大切さを

しっかり実感として受け止める。保育に関わっていけること、子どもたちと共に過ごしていける難しさと喜びと充実感を意識してほしい。実習とは何だろう。ともう一度自分自身に問いかけ、意識と意欲を高めて実習に臨んでほしいと思う。

学生自身が自覚をもつこともちろんであるが、実習を受け入れる現場においても、「実習の意義」「何を学ばせたいのか」「評価基準をどこに置くのか」等教師間の意識の統一を図っておかなくてはならない。保育者自身の保育観。保育に対する情熱をしっかり示しながらも、それを実習生に押し付けるようなことにはならないように気をつけなければならない。

当園では「現場で育てる」という意識を持って実習生と向かい合っていくこと。しっかり声を掛けて認める面と、厳しく指導する面。保育に関わる者として気持ちの暖かさと心の柔らかさもって実習生の指導にあたる。そんなことを教師間で互いに意識して指導するように声をかけあっている。

実習は厳しいものであるが頑張ってそれを乗り越え、より保育者になりたいという気持ちが育っていくことが現場においての願いでもある。

実習生と向き合うのは情熱と根気がいる。そのためにも私たち保育者自身の力量を高めていくことと、心のゆとりをもっていくことの大切さを改めて感じるこのごろである。

[資　料]

上田女子短期大学
実習生氏名

11月　1日	火　曜日	天候　晴れ	まつ1組　5歳児

今日試みたいこと
。子どもたちの遊びを一歩ひいたところから観察する。
。関わりの少なかった子と、積極的に遊ぶ。

時間	幼児の活動	保育者の動き	実習生の動き	気づいたこと
7:50		・2組の先生と打合わせをしながら、歌の録音の準備をする。 ・部屋の中の確認をしながら、紙や箱の補充をする。	・先生方に挨拶してから部屋、テラスの清掃をする。 ・先生と一緒に環境を整える。	・昨日の子どもの様子から部屋の中の配置や紙や、箱の量を考えて環境を整えていた。
8:00	順次登園 ・荷物の整理をしてから出席ノートにシールを貼る。 ・AさんとBさんが縄とびをする。 ・CさんとDさんが追いかけっこを始め、そこに段々友だちが加わり鬼ごっこになる。 ・カルタ遊びやブロックなど、各々自分のやりたい遊びをする。 ・Fさんが家で作ってきた矢を友だちに見せている。 ・Gさん、Hさん、Iさん、Jさん、Kさんがかくれんぼをする。仲間がふえていく。	・1人1人の顔を見ながら声をかける。 ※1（子どもたちに、バスに添乗することを伝えてから出掛ける。） ・「ただいま」と大きな声で言いながら、バスからもどり ※2（朝会えなかった子どもたち1人1人をだきしめていた。） ・裏山に遊びに行く。	・1人1人に声をかけて荷物の整理を促す。 ・縄飛び遊びに加わり、縄をまわしながら数える。 ・保育室にもどって、ブロックやままごと遊びに加わる。 ・時々廊下へ行き、外の遊びの様子を見る。 ・Gさんに誘われて一緒にかくれんぼをする。	※① （・担任の先生の居場所をしっかり伝えることで、子どもたちは安心して遊べる。） ・こちらが一定のリズムで縄をまわしても飛ぶことができている。 ・私の使う分のブロックが少ないことに気づいたEさんが「いっぱいないと、かわいそうだから、あげる。」と分けてくれて、気使いに驚いた。 ※② （・だきしめられた子の顔がパッと輝やいた。声を掛ける、スキンシップをすることの大切さを感じた。） ・「全員同じ場所じゃみつかっちゃう。」等意見を言いあいながら、遊びてより楽しいものにしようとしていた。
10:30	片付け。 トイレ、手あらいをして椅子に座る。	・片付けを促し、手あらい、うがいを忘れないように声をかける。	・子どもたちと一緒に片付けをする。※③ （手をだしすぎないようにする。）	

※（大切な援助ですね）

園児出席数 32 名		欠席者数 1 名	担任 白鳥 恵 先生	
時間	幼児の活動	保育者の動き	実習生の動き	気づいたこと
10:40	・頭、肩、ひざ、ポンをする。 ・実習生の問いに答えたり、自分の意見を言う。 ・リレーがしたい。ドンジャンケンがしたい等、各々話している。 ・挙手をして意見を言う。 ・勝手にとびださない。 ・相手と手をパチンとあわせる。 ・あとだししないなど挙手をして発言する。 ・エーッ 恥しいーという子がいた。	・部屋のうしろ側で実習生の様子を見ながら一緒にやる。 ・「今日は、帰りの時間に何をしたい。」と問い、1人1人の意見を聞いていく。 ・「ドンジャンケン」で守ることは何か。と問いかける。 ・1人1人の意見を聞き他の子に投げかける。 ※4 ・今日は歌を録音することを伝える。	〈部分実習〉朝の活動をする。 テンポを変えながら頭、肩、ひざ、ポンをする。 ・今日から11月ということと、昨日は何をしたか等話す。 ・1人1人の顔をみながら名前を呼んで出席をとる。 ・先生や子どもたちの様子を観察する。 ※④	・子どもたちは少しずつ集中していった。 ・各々自分の意見をしっかり言っていた。 ・こっちにしっかり顔をむけて返事ができていた。 ・「〜がしたい。」というところまできちんと言うように声を掛けていた。 ・「ドンジャンケン、みんな上手になってきた。」と誉めて気持ちを高めていた。 ・ルールを先生が勝手に決めて言うのではなく、子どもたちに考えさせることで守ろうという気持ちになっていくと思った。
		中略		
11:30	・好きな遊びをする。 ・Gさん、Hさん、Iさん、Jさんらが朝のかくれんぼの続きをはじめる。 ・Gさんがころんだことから「だるまさんがころんだ」に遊びがかわっていく。	・子どもたちの中に入って遊ぶ。 ・遊びに入らないで立っていたLに声をかけていた。 Lと山へ遊びに行く。	・かくれんぼの仲間に入って遊ぶ。 ※⑤ ・子どもたちの話し合いの時、あまり口は出さず見守る。意見の言いにくそうな子には声を掛ける。	・Gがころんだことからどうすれば安全にかくれんぼができるのか。他に安全な遊びはないか。と子どもたちが話し合いをはじめた。その場に応じて話し合う力が子どもたちにあることを知った。

	と、応援しあいながら遊んでいた。	中略		・頑張り豆は子どもたにと〜嬉し
13:20	・片付けをして園庭に集まる。 ・「やったー勝つぞ」など口々に言っている。 ・グループでどのチームと対戦したいか話し合う。 ・ルールを口々に言う。 ・ドンジャンケンをする。チームの仲間を応援する。 ・またやりたい。 ・もっと長くしよう。などの意見がでた。	・園庭に線をひきドンジャンケンの準備をする。 ・相談の仕方をほめながら様子を見る。 ・対戦チームを発表し朝決めた4つのルールを確認してから始める。 ・2カ所の場所の様子をよく見ながら声をかける。 ・ゲームの様子を子どもたちに伝え「次はどうする。」と言う。	・片付けを一緒にやり、園庭にでる。 ・子どもたちのそばで相談の様子を見守る。 ・応援しながら時々線をひきなおす。	・段々集まりながら「頑張るぞ」「勝つぞ。」という気持ちが高まってきていた。※⑥ ・「朝決めたルールを守ろう。」という声が子どもたちからでた。 ・皆真剣に勝負しているからこそ楽しさがあると思った。
13:35	・部屋にもどって帰る支度をする。		・「頑張っていたね。」「おもしろかったね。」など子どもたちと話しながら部屋にもどる。	
		後略		
	・「落ちた」をする。	・子どもたちの様子を		

— 感想・反省 —

※ ⑦

今日で1週間が終りました。私にとって1週間は本当に「あっ」という間でした。1日1日の目標を自分なりに達成できるように実習に望んできましたが、1週間を終えて改めて自分自身を見つめ直し新たな課題をみつけて、残りの実習に励んでいきたいと思っています。
今日でジャンケンゲームが一段落しました。一番最初にした時よりも子どもたちの意欲と団結力が、表情や活動に対しての姿勢にあらわれていたと思いました。積み重ねの活動の中で、子どもたちがより楽しくその活動を続けていくためには、どんな工夫が必要なのかを考え、行動していくことが、子どもたちがその活動から何を学び、何を得られるかに大きく関係してくると思いました。
来週の責任実習では、子どもたちが「面白かったな、もう一回したいな」と思えるように。その活動から少しでも感じる何かがあるように、きちんと計画し、実践していきたいです。

— 質問事項 —

今日の帰りの会におきた話し合いのような場面の中で、青チームが「ごめんね」と謝ったことについて、もう少し時間があれば、つっこんでいきたかったとおっしゃっていましたが、もし本当に時間があって、先生がそのことにつっこんでいたとしたら、あの後の話し合いはどのような展開をしていき、どのように終ったのでしょうか。
どのように終るのが望ましいとお考えになっていらっしゃるかおしえてください。

— 明日試みたいこと —

- 一週間の始りということで、明るくさわやかな一日が送れるように明るい笑顔で、子どもたちと思いっきり遊ぶ。
- 一週間目よりも、充実した帰りの会ができるように心掛ける。

— 指導者の言葉 —

保育の内容はその時思いついて行っているのではなくしっかりした見通しを持ち、その中で子どもたちに何を経験させたいか、1人1人の課題は何か、しっかり見極めて援助していきます。
一週間たって見方がどんどん深まっています。
子どもとの関わりを密にしより深くより広く学んでいって下さい。